

## 六条院の成立(下)

平 沢 竜 介

### 五 五行思想と異なる方位と季節

この問題を考えるには、まず物語作者が秋好中宮に秋という属性を与えた場面にもう一度立ち戻る必要があるろう。

「はかばかしき方の望みはさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりしにしがな。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらそひはべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらざなれ。唐土には、春の花の錦にしくものなしと言ひはべり、大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。狭き垣根の内なりとも、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽せさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」と聞こえたまふに、いと聞こえにくきことと思せど、むげに絶えて御答へ聞こえたまはざらんもうたてあれば、

「ましていかか思ひ分きはべらむ。げにいつとなき中に、あやしと聞きし夕こそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」と、しどけなげにのたまひ消つものいらうたげなるに、

(薄雲(2)四六一—四六二)

二条院に里下がりしてきた秋好中宮に向かつて源氏は、「春と秋の優劣を昔から多くの人々が論じてきたが、その優劣は未だ定まっていない。中国では春の花の錦に及ぶものはないとし、日本では秋の趣をすばらしいとするが、どちらも素晴らしくその優劣は決めかねる」と語り、秋好中宮に春と秋のどちらの季節に心を寄せているかと尋ねる。秋好中宮が躊躇つても秋と答えると、源氏はその足で紫の上の許を訪れ、

女君に、「女御の、秋に心寄せたまへりしもあはれに、君の春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ。時々につけたる木草の花に寄せても、御心とまるばかりの遊びしてしがな」と、「公私の営みしげき身こそふさはしからね、いかで思ふこととしてしがな」と、「ただ御ためさうさうしくやと思ふこそ心苦しけれ」など語らひきこえたまふ。

(薄雲(2)四六四—四六五)

と、秋好中宮が秋に心を寄せていらっしや、あなたが春に愛着を示し

ているのもっともなことと語る。

物語作者は若紫巻を執筆する以前の段階では、源氏が明石から帰京した後、二条院の東に二条東院を造営し、二条院の西の対に東、春を表象する紫の上、二条東院の東の対に西、秋を表象する明石の君、二条東院の西の対に南、夏を表象する花散里、北の対に北、冬を表象する末摘花を配し、二条院と二条東院を合わせて四方四季の邸を構築する構想を抱いていたと推測される。しかし、明石の君の身分が他の三人の女性たちの身分に比べて著しく劣っていることから、彼女に西、秋を表象させることの難しさを感じ、彼女が明石から上京するに際して、二条東院に直接入居させることをせず、大堰の山荘に移り住まわせることによって、彼女に北、冬という屬性を賦与するという変更を施した。この変更によって、当初の構想で北、冬を表象することを予定されていた末摘花は、四方四季を表象する四人の女性から外され、明石の君が当初表象する予定であった秋を表象する女性が不在となった。と同時に、二条院の東に二条東院を造り、二条院の西の対に東、春を表象する紫の上、二条東院の東の対に西、秋を表象する明石の君、二条東院の西の対に南、夏を表象する花散里、北の対に北、冬を表象する末摘花を配して四方四季の邸を造営するという物語作者が当初描いていた構想も、明石の君が西、秋を表象する女性から北、冬を表象する女性へと変更されたことによって放棄せざるを得なくなった。その結果、物語作者は新たに秋を表象する女性を見出さなければならなくなるとともに、この新たに秋を表象する女性と春を表象する紫の上、夏を表象する花散里、冬を表象する明石の君の三人を一カ所に集めて、新たに四方四季の邸宅を造営する必要に迫られることとなった。

そのような状況において、右に引用した薄雲巻での源氏が春秋の優劣

に言及した場面が語られる。引用の前半部分で、秋好中宮が秋に心を寄せていることが判明した時点で、秋好中宮が秋を表象する女性となることが確定し、明石の君の大堰移住以来問題となってきた秋を表象する女性の不在は解消されることになるが、ではなぜ、秋好中宮に好みの季節を聞くに際して、源氏は春、夏、秋、冬の四つの季節のうちどの季節に心を寄せるかと尋ねず、春と秋のどちらの季節に心を寄せるかと尋ねたのであろうか。

古来我が国においては春と秋の優劣を問う試みは、多くの人々によってなされており、『源氏物語』以前にも数多くの春秋優劣論が闘わされて来たのに対し、夏と冬の優劣を論ずる試みは全く見出されない。このことは我が国においては春、夏、秋、冬の四つの季節のうち、春と秋が夏と冬に比べてより賞翫すべき季節であり、春と秋が夏と冬に比べてより魅力的で優位な季節という地位を保ってきたことを示しているよう。源氏が秋好中宮に好みの季節を尋ねるに際して、春と秋のいずれを好むかと問いかけたのは、春と秋が夏や冬より優れた季節であることを前提とし、冷泉帝の後宮において中宮として確固たる地位を占める秋好中宮に、その優れた二つの季節のどちらかを選ぶ以外に選択の余地がないことを示したものであろう。秋好中宮にふさわしい季節を割り当てるといふ重要な場面において、彼女に春、夏、秋、冬のどの季節を好むかではなく、春と秋のどちらを好むかと尋ねることは、右に示した春と秋の夏と冬に対する優位性を前提とする。もちろん、どちらの形で尋ねても、源氏の問いに対して秋好中宮は秋に心を寄せると答え、秋を表象する女性となつたであろうが、源氏の秋好中宮に対する「春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらそひはべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらざなれ。唐土には、春の花の錦にしくものなしと

言ひはべめり、大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥の色をも昔をもわきまへはべらね」という問いかけと、紫の上に対する「女御の、秋に心寄せたまへりしもあはれに、君の春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ」という発言は、秋好中宮の秋と紫の上の春が夏や冬といった季節を凌駕するものであることを明確に示すものとして有効に機能している。

こうして、六条院において四季を表象する女性は、春は紫の上、夏は花散里、秋は秋好中宮、冬は明石の君と定められたが、その中で最も留意すべきは明石の君が四人の女性の中で最も身分が劣った女性であるということである。彼女は物語執筆当初に構想された二条東院構想においては西、秋を表象する女性であったが、物語が進むにつれてその出自の卑しさ故に北、冬を表象する女性へと変更を余儀なくされた。その結果、二条院の東に二条東院を造営し、二条東院の東の対に明石の君を迎え入れて四方四季の邸を構築するという構想は放棄され、新たな四方四季の邸として六条院が造営されることになった。つまり、物語作者が二条東院構想を放棄して六条院造営を決意したのは、明石の君を北、冬を表象する女性と位置づけるざるを得ないという事実起因していた。故に、六条院を構想するに当たっては、明石の君を六条院の北、冬を表象する女性にふさわしい場所に配置することが最も優先されねばならない課題となった。その結果、明石の君を六条院の北側に位置する町、すなわち丑寅の町、あるいは戌亥の町に住まわせることがまず決定されたと考えられる。

また、当時の内裏や有力貴族の邸宅においては、重要な殿舎は邸宅の南に建てられる傾向が見て取れる。右に述べたように、春を表象する紫

の上と秋を表象する秋好中宮の夏を表象する花散里、冬を表象する明石の君に対する優位性が存在することから、先に想定した東西二町、南北二町の六条院の中に存する四つの町のうち南側二町は春と秋の町となり、北側二町は夏と冬の町が配置されることになる。

またそれと同時に、紫の上と明石の君、秋好中宮と花散里の対偶性と対極性も考慮されたであろう。六条院に入居した四人の女性のうち、六条院完成の時点で源氏と男女の關係で結ばれているのは、紫の上と明石の君のみであった。この点に関しては、紫の上と明石の君は源氏から同等の愛情を得ていたと考えられる。また、明石の君が明石の姫君の実の親であるのに対し、紫の上は育ての親である。この点においても紫の上と明石の君は対偶性を持つ。ただし、紫の上が側室腹であるにしても式部卿の宮の娘、つまり皇族であるのに対し、明石の君は祖父が大臣ではあるが、父は播磨の守となりそのまま播磨の地に土着した一豪族明石の入道の娘にすぎない。紫の上と明石の君は、身分という面において対極の位置にある。そして、この身分の相違が六条院における紫の上の源氏の正妻格としての地位を保証するとともに、明石の君が六条院の四つの町に入った女性の中で最も格の低い地位に位置づけられることの根拠となる。

六条院に入った他の二人の女性、秋好中宮と花散里についていえば、秋好中宮は冷泉帝の後宮に入り、源氏と男女の關係を持つことはない。花散里も桐壺帝の御代に姉の麗景殿の女御とともに内裏で過ごしていた時に源氏と關係を持ったが、六条院に入った今では、

今はただおほかたの御睦びにて、御座なども別々にて大殿籠る。

などてかく離れそめしぞと殿は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやと側みきこえたまはで、年ごろかくをりふしにつけたる御遊びど

もを、人づてに見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおばえきらきらしと思したる。

その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつるとおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。

にほどりに影をならぶる若駒はいつかあやめにひきわかるべきあいだちなき御言どもなりや。「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるはこころやすくこそあれ」と戯れ言なれど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。床をば譲りきこえたまひて、御几帳ひき隔てて大殿籠る。け近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れてきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

(螢③二〇八—二〇九)

とあるように、二人の關係は既に途絶している。

また、秋好中宮の母である六条御息所と花散里の町に迎え入れられる玉鬘の母夕顔は、かつて源氏と關係を持ちながら、今は關係を有していないという点で共通性を持つと同時に、夕顔巻で登場し、源氏の愛情を受けながら、一方は物の怪に取り殺され、一方は物の怪となって人を取り殺すことで源氏との恋愛關係を絶たざるを得なくなった女性であるという点で対照的に描かれる。夕顔の娘である玉鬘が花散里のもとに引き取られることで、六条御息所の娘である秋好中宮と夕顔の娘の玉鬘は、ともに実の父親ではない源氏の邸に引き取られるという点においても共通性を持つ。

しかしその一方、六条御息所と花散里を比較した場合、六条御息所が先の東宮の正妻で娘を儲けたのに対し、花散里は桐壺帝の女御の中でもそれほど寵愛を受けることのなかった麗景殿の女御の妹であり、身分的

には六条御息所の方が花散里よりかなり格が高い女性ということができよう。また、六条御息所の娘の秋好中宮と花散里に引き取られた玉鬘を比較した場合も、前東宮とその正妻六条御息所の間生まれ秋好中宮と、もとは高貴な身分でありながら父親を失い卑しい身の上となり、内大臣(かつての頭の中將)とかりそめの關係を結んだ夕顔の間に生まれた玉鬘とでは、身分の高さという点で明らかに秋好中宮の方が勝っている。とすると、かつて六条御息所が住み、今はその娘秋好中宮の住まう町と花散里と玉鬘が住まう町とは対偶性を有しつつも、秋好中宮が住まう町が花散里と玉鬘の住まう町より優位性を持つことになる。

ところで、東西二町、南北二町の敷地に東西一町、南北一町の邸を、丑寅の町、辰巳の町、未申の町、戌亥の町という四つの町を配置する六条院において、それぞれの町が四方と四季を表象する町となるためには、南北の方位を表す軸は六条院の戌亥から辰巳に向けた形で設定するか、丑寅から未申に向かって設定するしかない。前者の場合、戌亥の町が北の町、辰巳の町が南の町となり、南北の軸の右側に位置する丑寅の町が東の町、左側に位置する未申の町が西の町となる。後者の場合、南北の軸は丑寅の町から未申の町に向かって引かれ、丑寅の町が北の町、未申の町が南の町となり、南北の軸の右側に位置する辰巳の町が東の町、左に位置する戌亥の町が西の町となる。

また先にも指摘したが、当時の貴族の邸宅は南が北に対して優位性を持つ。とすると、六条院のように丑寅の町、辰巳の町、未申の町、戌亥の町という四つの町で構成された邸宅では、辰巳の町や未申の町は、丑寅の町や戌亥の町に対して優位性を持つ。

紫の上と明石の君は対偶性を有しつつ紫の上が明石の君に優位性を示すという關係を持ち、六条御息所と秋好中宮の親子と花散里と玉鬘のペ

アも対偶性を持つと同時に、六条御息所と秋好中宮の親子が花散里と玉鬘のペアに対して優位性を示すという関係を持つことを考慮すると、紫の上と明石の君の組み合わせと六条御息所と秋好中宮のペアと花散里と玉鬘のペアの組み合わせは、いずれかの組み合わせを南北の軸とし、それ以外の組み合わせを東西の軸として、それぞれの組み合わせで優位性を有している紫の上と六条御息所と秋好中宮のペアを六条院の南側、すなわち辰巳の町ないし未申の町に配置するのが最も自然な形となる。では、六条院の辰巳の町と未申の町のどちらに、紫の上を入れ、六条御息所と秋好中宮のペアを入れるべきであろうか。

明石の君が秋を表象する女性から冬を表象する女性へと変更されたのは、彼女が明石から上京したにもかかわらず、当初予定されていた二条東院の東の対に入居せず、大堰の山荘へ移住したという事実に基づくものであった。大堰の山荘は兼明親王の山荘が準拠とされるが、明石の君が冬という季節を表象する女性とされたのは、兼明親王が大堰の山荘の裏にある亀山から水の湧き出ることを願った祭文で、大堰の地が水の地であり、方位では北、季節では冬を表象するとされたことによる。

伏見此山之形、以亀為体。夫亀者玄武之靈、司水之神也。甲虫三百六十之属、在於北方、靈龜為之長。或背負蓬宮、不知幾千里、或身遊蓮葉、不知幾万年。神靈之至誠無量者也。他山莫不有水、此山豈可乏水乎。夫水者稟秋氣於庚之金、盛正位於北方、養春味於震之木、帰末流於東南。群品為之亭毒、万物為之生育

（伏して此の山の形を見れば、亀を以て体と為せり。夫れ亀は玄武の靈、司水の神なり。甲虫三百六十の属、北方に在りて、靈龜之が長為り。或いは背に蓬宮を負ひて、幾千里といふことを知らず、或いは身蓮葉に遊びて、幾万年といふことを知らず。神靈の至誠無量

なる者なり。他の山水有らずといふこと莫し、此の山豈に水に乏かるべけんや。夫れ水は秋の氣を庚の金に稟けて、正位を北方に盛んにし、春の味を震の木に養ひて、末流を東南に帰す。群品之が為に亭毒し、万物之が為に生育す。）

引用した祭文の一節の最後の部分、「夫れ水は秋の氣を庚の金に稟けて、正位を北方に盛んにし、春の味を震の木に養ひて、末流を東南に帰す」という表現は、明石の君の住む大堰が水の地であり、東南の金の氣を稟けて、西南の木の地に春の氣を流し、それによって万物を生育させるとする。これは、水の地に住む明石の君が、春を表象する紫の上のもとに我が子明石の姫君を養女として差し出し、その結果明石の姫君は、帝の后としての第一歩を踏み出すこと、および明石の君の財力が源氏の榮華の経済的な基盤を支えていることに対応する表現と見ることができるとではなからうか。とするなら、明石の君と紫の上の位置関係は、明石の君の東南の方向に紫の上が位置するというのが最もふさわしいということになる。

六条院において戌亥の町は明石の君の住まいとなり、辰巳の町は紫の上の住まいとなる。また、六条御息所と秋好中宮のペアと花散里と玉鬘のペアは、六条御息所と秋好中宮のペアが優位性を持つことから、丑寅の町に花散里と玉鬘のペアが住み、未申の町には六条御息所と秋好中宮のペアの住まうことになる。五行思想では、東は春、西は秋とされるが、六条院の南側の人物の配置に限ってみれば、南側の東に春の町、西に秋の町という配置は、五行思想に則ったものといふことができよう。

さらに注目しなくてはならないのは、少女巻で夕霧の目を通して語られる花散里の容貌である。

ほのかになど見たてまつるにも、容貌のまほならずもおはしける

かな、かかる人をも人は思ひ棄てたまはざりけりなど、わがあながちにつらき人の御容貌を心にかけて恋しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめと思ふ。また、向かいて見るかひなからんもいとほしげなり。かくて年経たまひにけれど、殿の、さやうなる御容貌、御心と見たまうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつ、何くれともてなし紛らわしたまふめるもむべなりけり、と思ふ心の中ぞ恥づかしかりける。大宮の容貌ことにおはしませど、まだいときよらにおはし、ここにもかしこにも、人は容貌よきものとのみ目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、瘦せ瘦せに御髪少ななるが、かくそしらはしきなりけり。

(少女(3)六七—六八)

花散里の容貌を初めて見た夕霧は、花散里の氣立ての良さを認めつつも、その器量の悪さへの驚きを禁じ得ない。花散里は花散里巻以降この場面に至るまで物語にしばしば登場し、その氣立ての良さや裁縫や染色の才能についての言及はなされるが、その容姿について特に触れられることはなかった。源氏と花散里との関係を考慮すると、花散里が格段に優れた容貌の持ち主でないことは容易に想像されるが、かといって夕霧が見たような醜い容貌の持ち主との印象もそれ以前の叙述からは想像できない。むしろ、花散里の優れた性格からすれば、ほぼ人並みの器量と考えるのが穏当であろう。ところが、この少女巻の夕霧の垣間見の場面に至って初めて彼女の醜貌が明らかにされる。

この突然の変貌は、彼女が六条院の丑寅の町に入ることが決まった時点でなされたのではなからうか。既に述べてきたように、六条院では戌亥の町に明石の君、辰巳の町に紫の上、未申の町に秋好中宮、丑寅の町に花散里が入ることが確定された。もし、二条東院構想が放棄されるこ

となく明石の君が二条東院の東の対に入り、二条東院構想が完成していたなら、二条院・二条東院空間の鬼門にあたる丑寅の方位には醜い末摘花が住まい、二条院・二条東院空間を守護することが構想されていたと想定されることから、花散里にはこのような醜い容貌が与えられることはなかったであろう。しかし、二条東院構想が破綻し、六条院の造宮が構想され、花散里が六条院の丑寅の町に入居することが決まった時点で、彼女に醜い容貌が賦与されることが要請されることになる。邸の東北は鬼門に当たると。二条東院構想では、二条東院の北の対、二条院・二条東院空間の東北にあたる殿舎に醜い末摘花が配置されていた。彼女はその醜さ故に悪霊たちの襲来を防ぐ役割を担っていた。しかし、二条東院構想から六条院の造宮へと構想の変更がなされた時、北、冬を表象していた末摘花は、その北、冬という表象を明石の君に奪われ、六条院に入ることとは許されなくなった。しかも、六条院の南の二町は、紫の上、秋好中宮という最上級の女性が入居し、北側に入るのは明石の君と花散里の二人ということになった。言うまでもなく、明石の君を鬼門の丑寅の町に入れ、醜い容貌を与えることは不可能である。それに先に検討したように、明石の君が住まう町は六条院の戌亥の町以外には考えがたい。とすれば、六条院の鬼門にあたる丑寅の町に住むのは花散里ということになり、彼女は悪霊の侵入を防ぐため醜い容貌を持つことを余儀なくされる。もちろん、花散里に醜い容貌を与えることが決まったとしても、それをすぐに実行するわけにはいかない。しかし、できることなら六条院に四人の女性たちが入居する以前の方がいい。花散里が夕霧の後見役となり、夕霧が花散里の容貌を垣間見ることができるようになったのは、六条院が完成する年の前年である。物語作者は既にこの時点で、花散里を六条院の丑寅の町に入居させると同時に、彼女に醜い容貌を与えるこ

明石の君 冬・北	紫の 春・東
秋好中宮 秋・西	花散里 夏・南

図 1

秋好中宮 秋・西	明石の君 冬・北
花散里 夏・南	紫の 春・東

図 2

明石の君 冬・北	花散里 玉夏・東
秋好中宮 秋・西	紫の 石の姫君 春・南

図 4

とを決定していたと推測される。

以上の検討から、六条院のそれぞれの町にどの女性を住まわせるかという問題は、明石の君が北、冬を表象する女性とすることを最優先とし、春と秋の夏と冬に対する優位性、紫の上と明石の君の対偶性と紫の上の優位性、六条御息所と秋好中宮のペアと花散里と玉鬘のペアの対偶性と六条御息所と秋好中宮のペアの優位性、兼明親王の祭文から導かれた紫の上の居所が明石の君の居所の東南に位置させるべきとの制約、さらに六条院の鬼門に当たる丑寅の町に住む女性には醜貌を与え得る女性を置く必要があるといった条件を総合的に勘案して決定されたものと判断される。その結果、物語に実現された六条院のそれぞれの町に入る女性とその女性が表象する季節、方位は、五行思想の方位と季節の対応関係に則った図1、図2のような対応関係と異なった図4のような対応関係を示すことになる。

## 六 六条院の殿舎と庭園

六条院の女性たちの住まいはいずれも一町の広さを持つが、そこに構えられた殿舎は全く同じ造りとはなっていない。紫の上、秋好中宮、花散里の住む辰巳の町、未申の町、丑寅の町は、いずれも南に池を造り、寝殿とその東西に対屋を持つ典型的な寝殿造りであると想定されるが、明石の君の住む戌亥の町は

西の町は、北面築きわけて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり。冬のはじめの朝霜むすぶべき菊の籬、我は顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなど移し植ゑたり。

（少女(3)七八一八〇）

というように、町の北側は御倉町となっており、池の有無ははっきりしないが、池がないと指摘する研究者も多い。また、明石の君の住む殿舎は

かの明石の御町の中の対に渡したてまつりたまふ。こなたはただ大きな対二つ、廊どもなむ廻りてありけるに、（若菜上(4)一〇三）とあり、対屋を二つ連ねたばかりの造りとなっている。北側にある御倉町は明石の君の財力を示すものであり、源氏の栄華の経済的な基盤を支える明石の君の存在の大きさを示すものといえようが、他の町のように寝殿造りとなっておらず、対屋二棟のみの極めて簡素な造りは、彼女の身分が他の三人の女性に比べ著しく劣っていることを示している。

また、辰巳の町、未申の町、丑寅の町も子細に見れば、紫の上の住む辰巳の町だけが西の対屋を二つ持っており、未申の町、丑寅の町に比べて対屋が一つ多い構造となっている。

このように六条院の四つの町の造りを比較した場合、辰巳の町が一番豪華な造りとなり、未申の町、丑寅の町はそれよりやや劣った造り、戌亥の町のみが他の町と著しく劣った造りとなっていることが見てとれる。こうした六条院のそれぞれの町の造りの相違は、それぞれの町に住む女君の格の高さを反映したものといえよう。すなわち、紫の上が最も高く、それにやや劣る形で秋好中宮、花散里と玉鬘が位置し、それら三人とはかなり劣った存在として明石の君が定位されていると見ることができよう。これまでもしばしば述べて来たことであるが、明石の君の出自の低さは、この戌亥の町の造りの簡素さにも明確に示されている。

また、それぞれの町に住む女性たちの庭にはそれぞれの町に住む女君が表象する季節の植物が数多く植えられている。それらの中で各町に住む女性たちを表象していると思われる植物を見てみると、紫の上は桜、秋好中宮は紅葉、花散里は橘、明石の君は松ということになる。

紫の上を表象する植物が桜であることは、源氏と紫の上が初めて出逢う北山で桜の花が印象的に描かれていること、またそれ以降の物語で彼女が桜の花に喩えられていることから明らかであろう。花といえば桜とされていた当時において、六条院に住まう女君の最高位を占め、春という季節を表象する紫の上にとって、桜の花は彼女を表象するに最もふさわしい花であったといえよう。少女巻の六条院のそれぞれの町の庭の様を記した描写では、春の町である辰巳の町の庭は

南の東は山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり。

(少女(3)七八―七九)

と表現され、桜は特に強調されていないが、右に指摘したように物語全

体にわたっての記述から紫の上が桜に表象されていることは言うまでもない事実であろう。

それに対し、彼女の住む春の町の北に位置する夏の町、すなわち丑寅の町の庭の様子は、

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花のくさぐさを植ゑて、春秋の木草、その中にうちまぜたり。東面は、分けて馬場殿、づくり、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、むかひに御廐して、世になき上馬どもとのへ立てさせたまへり。

(少女(3)七九)

と、夏の草花を中心に様々な植物が植えられているが、その中で彼女を表象する植物といえは橘となるであろう。花散里は、桐壺帝の死後、政治的に次第に追い詰められた源氏が須磨に退去する直前、桐壺帝の女御であった麗景殿の女御の邸に赴く夏のある一日の様を描いた花散巻で、麗景殿の女御の妹で、桐壺帝在世中に源氏と宮中でかりそめの関係をもち、桐壺帝崩御の後は麗景殿の女御とともに、源氏の庇護のもとつつましく暮らしている女性として登場する。源氏が麗景殿の女御の邸を訪れると、邸には橘の花が懐かしい香りを放ちながら咲いている。彼女が物語で花散里と呼ばれるのは、この時の邸の様に因んだものであることから、花散里という呼称における花は橘ということになる。よって、六条院の夏の町に住み、夏を表象する花散里を表象する花といえは橘ということになる。

秋の町秋好中宮を表象する植物は紅葉とすることができよう。先に



も引用したように六条院の秋の町の庭は、次のように描かれる。

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木ども植ゑ、  
泉の水遠くすまし、遣水の音まさるべき巖たて加へ、滝落として、  
秋の野を遙かに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。  
嵯峨の大堰のわたりの野山むとくけおされたる秋なり。

(少女(3)七九)

秋好中宮の住まう未申の町の庭では、まず色濃く紅葉する木々が語られる。また、六条院が完成すると、八月に紫の上、花散里が六条院に移り住み、五、六日置いて秋好中宮が宮中より退出する。九月に中宮から紫の上に箱の蓋に花や紅葉を混ぜた贈り物が届けられる。その消息には心から春まつ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ

(少女(3)八二)

とある。この六条院入居後の秋好中宮の紫の上への贈歌からも、秋好中宮を表象する植物が紅葉であることが見て取れよう。

秋好中宮の住む未申の町の北側の町に住まう明石の君を表象する植物は松である。

西の町は、北面築きわけて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、  
雪をもてあそばんたよりによせたり。冬のはじめの朝霜むすぶべき  
菊の籬、我は顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深き  
など移し植ゑたり。

(少女(3)七九—八〇)

未申の町には松が数多く植えられている。明石の君の冬という属性を象徴する植物として松が用いられていることは既に指摘したが、この六条院の未申の町にも松が多く植えられているという事実は、松が北、冬を表象する明石の君にふさわしい植物であることを改めて確認させる。

なお、橘は『古事記』『日本書紀』では、垂仁天皇の御代に多遅摩毛

理(田道間守)が常世の国から持ち帰ったとされる「時じくのかくの木の実(時じくのかくのみ)」とされ、また『万葉集』では、

冬十一月に、左大弁葛城等、姓橘氏を賜りし時の御制作歌一首  
橘は実さへはなさへその葉さへ枝に霜置けどいや常葉の木

(卷七・一〇〇九)

と詠まれるなど、その永遠性が賞揚される。内裏の紫宸殿の前には、左近の桜とともに右近の橘が植えられているが、これも橘の永遠性を示すものといえよう。

このように、六条院の四つの町に住み四季を表象する四人の女君を表象する植物を改めて見てみると、六条院の南側に住み春を表象する紫の上には桜、秋を表象する秋好中宮には紅葉というように華やかではあるが、はかなく散っていく植物が当てられているのに対し、北側に住み夏を表象する花散里には橘、冬を表象する明石の君には松という地味ではあるが常緑の植物が当てられていることに気付く。六条院の南側にすむ女君は、北側に住む女君に比べて格の高い女君であったが、それらの女君を表象する桜や紅葉が華麗ではあるがはかなく散ってしまう植物であるのに対し、北側の女君を表象する橘や松は、華やかさには乏しいがいつまでも枯れることのない常緑の樹木である。六条院の南側の華やかな植物は六条院の栄華を象徴し、北側の常緑の樹木は六条院の永遠性を象徴すると見て取ることができよう。

### 七 東、山、仏と西、海、神

六条院の四つの町は、辰巳の町は南の町と呼ばれ春を表象する紫の上、

未申の町は西の町とされ秋を表象する秋好中宮（斎宮女御）、丑寅の町は東の町と呼ばれ夏を表象する花散里、戌亥の町は北の町とされ冬を表象する明石の君が住むというように、南に春、西に秋、東に夏、北に冬を表象する女性が居住する。五行思想では東と春、南と夏、西と秋、北と冬が対応するが、六条院においては春を表象する紫の上が南の町に住み、夏を表象する花散里が東の町に住むという点で、五行思想における方位と季節の対応とは、異なる対応関係を形成する。

しかし、そうでありつつも六条院を構成する四つのそれぞれの町が四方と四季のうちのどれか一つの方位と季節を表象することで、六条院は四方四季の邸を形成しているということは紛れもない事実である。源氏は明石の君から夜光る玉である明石の姫君を譲り受けることで海竜王となったが、海竜王の邸は四方四季であるとされることから、六条院という四方四季の邸の完成は、海竜王にふさわしい邸の完成を意味しよう。

と同時に、源氏が四方四季を表象する女君（未申の町の六条御息所は既に亡くなっているが）を娶るといことは、彼が四方と四季、すなわちあらゆる方位とあらゆる時間を支配する存在となったことを意味しよう。しかも、六条院を構成する四つの町は丑寅の町、辰巳の町、未申の町、戌亥の町と呼ばれ、東北、東南、西南、西北の方位をも示している。とすると、源氏は東、西、南、北の他に、東北、東南、西南、西北という方位も支配していることになり、彼の支配が全方位にあまねく広がっていることがより強調される。

また、若紫巻冒頭の北山山頂の国見儀礼と見做される源氏の眺望に際して、源氏の国土支配の原理として挙げられた東と西の水平軸、山と海の垂直軸という二つの軸に、仏と神という要素を賦与した観点から六条院の構成を見ると、紫の上は東・山・仏という属性を持っていたが、

斎宮として伊勢神宮に奉仕した経歴を持つ秋好中宮を養女として迎え入れることで、彼女の持つ東、海、神という属性を取り入れて東、山・海、仏・神という属性を有するようになる。

一方、西・海・神という属性を有していた明石の君は、大堰に移住し、嵯峨の御堂と結ばれることで、西・山・仏という属性を手に入れ、西・山・海、仏・神を表象することになり、彼女の娘の明石の姫君も西、山・海、仏・神を表象することになる。

紫の上は、秋好中宮を養女としたのみならず、明石の姫君も養女にすることから、紫の上と明石の姫君の持つ属性、すなわち東、山・海、仏・神という属性と西、山・海、仏・神という属性が合わさることによって、紫の上と明石の姫君はともに東・西、山・海、仏・神という属性を有することになる。

また、筑紫から上京した玉鬘は、西という属性を持つ。玉鬘一行は京に入ってひとまず九条の宿に落ち着くことができたが、今後どうしたらよいか途方に暮れる。そんな時、一行の長ともいえる豊後介が石清水八幡宮や長谷観音への参詣を勧める。

「神仏こそは、さるべき方にも導き知らせてまつりたまはめ。近きほどに八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、宮崎同じ社なり。かの国を離れたまふとても、多くの願立て申したまひき。今都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ」とて、八幡に詣でさせたまつる。(中略)「うち次では、仏の御中には、初瀬なむ、日本の中にはあらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあむなり。まして我が国の中にこそ、速き国の境とても、年経たまひつれば、若君をばまして恵みたまひてん」とて、出だし立てたてまつる。(玉鬘③)一〇三—一〇四

「八幡の宮」とは平安京の南にある男山に鎮座する石清水八幡宮のことであり、祭神は応神天皇、神功皇后、比咩神。「松浦」は肥前国松浦にある鏡神社のことと思われ、神功皇后、藤原広嗣を祭る。「宮崎」は筑紫宮崎にある宮崎八幡宮で、応神天皇、神功皇后、玉依姫を祭る。これらの神社は応神天皇とその母神功皇后を祭るという点で共通するが、この親子は神功皇后の朝鮮出兵説話に関わっており、海の神という性格を持つと考えられる。宮崎八幡宮や鏡神社は海の側にあり、鏡宮については物語に「ただ松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るるをなむ、かへりみせられて」という記述が認められる。「初瀬」が長谷観音を指すことは言うまでもない。これらの点を考慮すると、玉鬘は西、海、神という属性を持つと同時に、西、山、仏という属性も併せ持つと考えるのが妥当と思われる。

なお、玉鬘の居所を定めるに際し、物語は

住みたまふべき御方御覧ずるに、南の町には、いたづらなる対どもなし、勢ひことに住みみちたまひければ、顕証に人しげくもあるべし。中宮のおはします町は、かやうの人も住みぬべくのだやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなされむと思して、すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてあるを他方へ移してと思す。あひ住みにも、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば、うち語らひてもありなむ、と思しおきつ。  
(玉鬘(3)一二五)

と語るが、『源氏物語評釈』<sup>⑧</sup>では、この「あひ住み」を

そこに重ねて、この姫を住まわせるのだが、あずけると言わず「あひ住み」と言う。同格扱いである。

と指摘する。玉鬘が花散里と同格に扱われるとすると、丑寅の町は、玉鬘が有する西、山・海、仏・神という属性を備えることになる。

六条院の未申の町には秋好中宮が住まうが、彼女は伊勢の斎宮であったことから、東、海、神の属性を持つと同時に、紫の上の養女となることよって、東、山、仏の属性をも身に付けることになり、秋好中宮の住まう未申の町は東、山・海、仏・神を表象する町となる。また、戌亥の町は明石の君が住まうが、先に指摘したように彼女は西、山・海、仏・神を表象する。

なお、花散里と玉鬘の住む丑寅の町は六条院では東の町と呼ばれ、秋好中宮が住まう未申の町は西の町と呼ばれることから、丑寅の町は西、山・海、仏・神の他に東という町の方位が賦与され、未申の町には東、山・海、仏・神という属性の他に西という町の方位が賦与される。これを図示すると図5となる。

西	山・海	仏・神
東	山・海	仏・神

図 5

この図を見ると、紫の上と明石の姫君の住む辰巳の町は、東と西、山と海、仏と神という全ての要素を表象するのに対し、花散里と玉鬘の住む丑寅の町、秋好中宮の住む未申の町は、山と海、仏と神という四つの

要素を全て表象するが、方位という点で西ないしは東のみを表象するに過ぎない。ただし、六条院の町の呼称として丑寅の町には東の町、未申の町には西の町という呼称が与えられ、丑寅の町や未申の町に欠けている東や西という属性が町の呼称として賦与されている。しかし、それらはいくまでも町の呼称であり、そこに住む女君たちが表象する方位とはやや次元を異にするものと捉えることができよう。明石の君の住む戌亥の町は、方位として西という属性しか賦与されない。

つまり、紫の上、明石の姫君の住む辰巳の町が全ての属性を備え、それに次いで花散里と玉鬘の住む辰巳の町と秋好中宮の住む未申の町が方位の点で東と西のどちらかを欠きつつも町の呼称によりその不足を補っているのに対し、明石の君の住む戌亥の町は東という属性を全く欠いている。東と西の水平軸、山と海の垂直軸という二つの軸に、仏と神という要素を賦与した観点から見た場合、辰巳の町が最も優位を保ち、次いで丑寅の町と未申の町が同等の格を持って位置し、戌亥の町が最も劣った位置にあるということになる。またこの序列は、先に指摘した四つの町の造りと同様な序列となっている。町の造りと町が示す属性という二つの観点からの検討によって示された序列は、明石の君が六条院に住まう他の三人の女性たちと比べ、著しく劣った身分であることを判然と示すものといえよう。

先に六条院に住まう女君の中で、源氏と男女の関係を維持しているのは紫の上と明石の君のみであると指摘したが、右に示した六条院の造りや町の属性によって示される紫の上と明石の君の間に存在する大きな身分上の懸隔は、紫の上の地位を確固たるものとし、六条院に安定した秩序をもたらす。

また、町の造り、町の示す属性という観点からの考察では、東の町と

西の町は紫の上の住む南の町にやや劣るが、同等の重みを持つ。先に未申の町の辰巳の町に対する優位性を指摘したが、それはそれぞれの町に住まう人物の身分から導き出したもので、辰巳の町に住む花散里が生存しているのに対し、六条御息所は既に没している。また玉鬘が辰巳の町に常住しているのに対し、秋好中宮は冷泉帝の後として後宮に暮らしており、未申の町に常に居候していないことを考慮すれば、辰巳の町（東の町）と未申の町（西の町）は、実質的には同等の格を持つことになる。

## 八 六条院の仏と神

六条院が完成して迎えた最初の正月を描く初音巻は、春の町の描写から始まる。

年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうららけさには、  
数ならぬ垣根の内だに、雪間の若草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかに見ゆるかし。ましていとど玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見どころ多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。

春の殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾の内の匂ひに吹き紛ひて、生ける仏の御国とおぼゆ。  
(初音(3)一四三)

「春の殿」、すなわち紫の上と源氏の住む辰巳の町は、庭の梅の香りと御簾の内の焚き物の匂いが混じり合って、「生ける仏の御国」と思われると表現されるが、仏法における俗世の理想の王、転輪聖王であり、かつ普賢菩薩の化身と見做される源氏が六条院の主であることからすれば、

この「生ける仏の御国」という言葉は、六条院全体に及ぶものと考えてよいであろう。

辰巳の町に住む紫の上は東方瑠璃光浄土に住む薬師如来の庇護のもとにあり、戌亥の町に住む明石の君は西方の極楽浄土の教主である阿弥陀如来の庇護を受けていることは既に指摘した。丑寅の町に住む玉鬘も、長谷寺に参詣の途中、右近と巡り会うことから、観音菩薩の庇護を受けていると考えることができよう。未申に住む秋好中宮は、齋宮として伊勢神宮に赴いており、天照大神の庇護を受けていると考えられるから、さすがに仏の庇護は受けるわけにはいかないであろうが、彼女は初音巻に続く胡蝶巻で、内裏から退出し、未申の町で季の御読経を催している。他の三つの町が、如来や菩薩の庇護を受けているのに加えて、秋好中宮が未申の町で季の御読経を行うことによって、六条院全体が仏の徳に満ち満ちた、「生ける仏の御国」となっていることがここに明かされよう。

また、源氏は神々の王である海竜王でもあった。六条院の未申の町に住む秋好中宮は伊勢神宮に齋宮として仕えたことから、伊勢神宮の庇護を受けていると考えられる。戌亥の町に住む明石の君は、住吉大社の加護を受けていることは既に見てきた通りである。また、辰巳の町に住む玉鬘は、上京し九条に落ち着くとまず石清水八幡宮に参詣し、その後長谷観音に詣でており、石清水八幡宮の加護も受けていると考えられる。辰巳の町に住む紫の上は、六条院が完成してからかなり後のことになるが、藤裏葉巻で明石の姫君の入内に際して賀茂のみあれ祭りに詣でて

こうしてみると、六条院の四つの町に住まう女性は、秋好中宮が都の東に位置する伊勢神宮、明石の君が都の西の住吉大社、玉鬘が都の南に鎮座する石清水八幡宮、紫の上が都の北の賀茂神社の神の加護を受けて

いることになる。六条院の四つの町に四方と四季を表象する女性を住まわせるだけでなく、南の町に住み春を表象する紫の上は北の賀茂神社、西の町に住み秋を表象する秋好中宮は東の伊勢神宮、東の町に住み夏を表象する玉鬘は南の石清水八幡宮、北の町に住み冬を表象する明石の君は西の住吉大社というように、四つの町に住む四人の女性がそれぞれ東、西、南、北の神の加護を受けるといふ事実は注目し値する。

ただし、玉鬘は裳着に際して、父親が藤原氏であることを明かさねばならず、藤原氏の氏神である春日大社の庇護を受けることになるが、この春日大社も都の南に位置する社であることから、東の町に住み夏を表象する玉鬘が南の神の庇護を受けているといふ事実に変わりはなく、六条院が東、西、南、北の神々の庇護を受ける女性たちによって構成されているといふ事実に変更は生じない。

## 九 仙境としての六条院

さらに、胡蝶巻冒頭部分には、春の町の船衆の様子が次のように描かれる。

竜頭鷓首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、楫とりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に来たらむ心地して、あはれにもむしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。他所には盛り過ぎたる桜も、今盛

りにほほ笑み、廊を繞れる藤の色もこまやかにひらけゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもをくひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に文をまじへたるなど、物の絵様にも描き取らまほしきに、まことに斧の柄も朽いつべう思ひつつ日を暮らす。

風吹けば波の花さへいろ見えてこや名にたてる山ぶきの崎

春の池や井手のかはせにかよふらん岸の山吹そこもにほへり

亀の上の山もたづねじ舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ

春の日のうららにさして行く舟は棹のしづくも花ぞちりける

などやうのはかなごとどもを、心々に言ひかはしつつ、行く方も、帰らむ里も忘れぬべう、若き人々の心をうつすに、ことわりなる水の面になむ。  
(胡蝶(3)一六六—一六八)

楫取りの女童に角髪を結わせ、中国風の装いをさせた童頭鶴首の船に秋好中宮付きの若い女房たちを乗せ、中宮方の池から紫の上が住まう南の町の池に漕ぎ出すと、秋好中宮付きの女房たちは「まことの知らぬ国に来たらむ心地」がするという。まさにここ春の町は、異境空間なのである。池の上から眺めた春の町の景色はまるで絵に描いたようで、「まことに斧の柄も朽いつべう」思われるとされるが、この表現は仙境に迷い込んだ人物が童子が碁を打つのに見とれていて気が付くと、持っている斧の柄が朽ちていたという爛柯の故事を踏まえたもので、この異境空間が神仙世界であることを示している。

さらに、女房たちが詠ずる四首の歌のうち三首目の歌に詠まれる「亀の山」とは蓬萊山のことである。「列子」湯問篇に蓬萊山を「巨鼈十五をして、首を擧げて之を戴き」、つまり大きな亀が支えているとの表現

があり、既に拙稿で引用した兼明親王「祭龜山神文」にも蓬萊山は亀の背に乗っているとあるように、「蓬萊山」は亀の上に乗っていることから「亀山」とも呼ばれたのであるが、その亀の山を訪ねる必要もないというこの三首目の歌は、この六条院の春の町が蓬萊山に匹敵する神仙境であることを示唆していることになる。また、この三首目の歌の「舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ」という表現は、『白氏文集』卷三、新樂府「海漫々」の「蓬萊の島を見ずんば敢て歸らず。童男卯女舟中に老ゆ」を踏まえた表現との指摘がなされる。「海漫々」では、この詩句は始皇帝や武帝に命じられて不死の薬を探す人々が蓬萊山を求めて彷徨うが、蓬萊山にたどり着くことができず舟の中で皆老いてしまったことを詠じているが、女房の歌では、自分たちは「海漫々」で描かれる人々とは異なり、既に仙境に到達し、舟の中で老いることのない世界にいると「海漫々」の表現を反転させて、春の町が老いを知らない神仙境であると歌い上げる。

先に舟の中から眺めている女房たちの視点によって、まさに春の町の御殿と庭は「まことに斧の柄も朽いつべう」思われると表現されている部分が、爛柯の故事を踏まえたものであることを指摘したが、それにこの四首連続して並べられた歌群の三首目の歌の表現を合わせ考えると、舟の中の女房たちは春の町を神仙境と見、自身を蓬萊山に匹敵する地にたどり着いた人々に準えていると見ることができよう。

女房たちの歌に続く地の文では「行く方も、帰らむ里も忘れぬべう」と記されるが、『河海抄』はこの表現の注に、後漢の時代、天台山に薬草を採りに入った劉晨、阮肇が道に迷って、二人の美女と出会い、一緒に半年ほど暮らしたが、望郷の念にかられ故郷にかえってみると、自分たちの七代後の子孫が暮らしていたという「続齋諧記」に収められた劉

阮天台の故事を引き、春の町の神仙的雰囲気をより強調する。また、『新編日本古典文学全集』は、「此六条院のありさま、人間には比量すべき所なければ、只仙宮の如しとほめて云る也(岷江入楚)。一六七ページ」の「まことに斧の柄も朽いつべう…」に「照応」との頭注を付す。『続齋諧記』に載せられた説話に基づくか否かは別として、確かにこの「行く方も、帰らむ里も忘れぬべう」という表現は、「まことに斧の柄も朽いつべう…」という表現と照応し、六条院の春の町が神仙世界であることを確認する表現と見て取ることができよう。

ところで、既に示した通りに大堰の地は仙境でもあった。後に六条院が完成すると、明石の君は戌亥の冬の町、紫の上は辰巳の春の町に住むことになるが、二条院の紫の上のもとに養女として引き取られた明石の姫君も、紫の上とともに辰巳の春の町に住むことになる。このような六条院における人物の位置関係は、二条院を経由しており直接ではないにしても、最終的な結果だけ見れば、明石の姫君が西北の明石の君の冬の町から東南にあたる紫の上の住む春の町に移されたことを示し、兼明親王の祭文にあった「盛正位於北方、養春味於震之木、帰末流於東南」という表現と対応関係を認めることができる。

つまり、大堰の山荘で明石の君を囲繞していた神仙世界が、六条院の戌亥の町にもたらされ、それが東南の方向に流れて紫の上のいる辰巳の春の町をも覆うこととなったと考えることができるであろう。また、これも指摘したことだが、松風巻で源氏が太堰の山荘に留まっている明石の君を初めて訪れた後に催された桂の饗宴において、源氏は神仙と見做された。とするなら、彼が主として住む六条院そのものを神仙境と見做すこともできるのではなからうか。

六条院に山と海、四方四季を表象する女性を住まわせることで、光源

氏はあらゆる時間と空間を支配する王者となると同時に、転輪聖王や普賢菩薩の化身であり、海竜王、さらには神仙とされ、彼の住む六条院は「生ける仏の御国」であり、四方の神々に守護された神の王者の邸、さらには神仙境とも見做されることとなる。六条院は、このように源氏の王者性と聖性を様々な形で示すことによって、源氏の至高の栄華と絶対的な王者性を象徴する邸宅として物語世界に現前することになるのである。

注

- (9) 「二条東院構想試論(上)」(『白百合女子大学紀要』第51号、平成27年12月) 二条東院構想試論(下)」(『白百合女子大学』「言語・文学研究論集」第16号、平成28年3月)
- (10) 玉上琢彌「源氏物語評釈」第五卷一二〇頁に「花散里「あひ住み」という項目が立てられ、源氏が玉鬘を六条院のどこに住まわせるかを検討している部分の解説として、「明確に順位があるわけではないが、四つの町ではやはり北より南、西より東がよい位置だということが出来る。源氏は、姫君の住居を東南から西南、さらに東北と、最もよい位置から順に考えて行かれたのである。姫君の扱いを、かなり重く考えていることになる」という記述が認められる。
- (11) 兼明親王の祭文は「本朝文粹」から引用。「本朝文粹」は『新日本古典文学大系』に拠り、柿村重松「本朝文粹註釈」に従い、一部私に改めて訓み下した。
- (12) 「三谷栄一は、『物語史の研究』第三編、第三章(有精堂出版、昭和42年)において、紫の上が「春の御前」といわれる以上、当然「東」であるべきであるのは、「南の上」「南の御方」などと称され、辰巳の方向に位置づけられているのは、四方四季の信仰に戌亥の隅や辰巳の隅の信仰とが重なっているのだから、辰巳の方向も、また祝福される方角でここにも、前述のように、紫の上の性格が物語られているわけである」と指摘する。
- (13) 浅尾広良「源氏物語」の邸宅と六条院復元の論争点(倉田実編『王朝文

学と建築・庭園」所収、竹林舎、平成19年)

(14) 玉上琢彌「光る源氏の六条院復元図・第二案」(『源氏物語』と平安京) 所収、おうふう、平成6年)、池浩三「源氏物語」の六条院―その想定平面図の根拠」(『源氏物語』と平安京) 所収、おうふう、平成6年)

(15) 「明石の君の大堰移住(改稿)」(白百合女子大学「言語・文学研究論集」第17号、平成29年3月)

(16) 『万葉集』の本文は、『新編日本古典全集』に拠る。

(17) 同注15。

(18) 同注10。

(19) 拙著『王朝文学の始発』(笠間書院、平成21年) 第四章、第一節「源氏物語」と「古事記」日向神話」、第二節「末摘花論―石長比売と末摘花」

(20) 同注15。

(21) 渡辺仁史「源氏物語」の六条院について―四季の町の配列」(『中古文学』第53号、平成6年5月) は、『無量寿経』の「其仏国土、自然七宝、金銀瑠璃、珊瑚琥珀、磲磔碼磔、合成為地、恢廓曠蕩、付加限極。(中略) 亦無四時、春秋冬夏、常和調適。」という一節を引用し、「六条院は「春秋冬夏」が右旋によって配列されており、その美的様相の面でも何ら不調和や歪みといった意味を持たないのであり、極楽を現世に具現させたものと見做すことができ。」と指摘する。物語作者はこの「無量寿経」の表現をも念頭に置きつつ、六条院を「生ける仏の御国」とした可能性も考えられよう。

(22) 秋山虔、河添房江、松井健児、三角洋一「共同討議 物語文学の人間造形―源氏物語と以前以後」(『国文学』38巻11号、學燈社、平成5年11月)「源氏物語の鑑賞と基礎知識」、韓正美「源氏物語における神祇信仰」(武蔵野書院、平成27年)

(23) 河野貴美子「爛柯の故事」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識 絵合・松風』至文堂、平成14年) 160、161頁。

(24) 「列氏」は、『新釈漢文大系』に拠る。

(25) 「白氏文集」は、『統国訳漢文大成』に拠る。

(26) 小林正明「蓬萊の島と六条院の庭園」(『鶴見大学紀要』昭和62年3月)、上原作和「光源氏物語 學藝史 右書左琴の思想」(翰林書房、平成18年)

第三部、《爛柯の物語史》「斧の柄朽つ」る物語の主題生成は、この六条院春の町の神仙表現に六条院解体の予兆を読み取る。それに対し田中隆昭「仙境としての六条院」(『国語と国文学』75巻11号、平成10年11月) は、日本漢詩文の仙境表現を概観し、小林や上原の指摘は性急に過ぎると批判する。

なお、田中幹子は「源氏物語「胡蝶」の巻の仙境表現―本朝文粹巻十所収詩序との関わりについて」(『伝承文学研究』46号、平成9年1月) で、次のように指摘する。

仙境表現は、天皇、上皇等の威徳に捧げられた常套的表現であった。常套的であることが重要なのである。「胡蝶」の華やかさが特別であることは、同じ花の宴である「花宴」の描写の淡泊さが証明していた。「花宴」の宴は、主催が桐壺帝であるため、わざわざ天皇主催の宴の際に常套的表現をもちいなくてもその宴のすばらしさは既に保証されていた。

「胡蝶」の場面は、天皇でない光源氏の私邸での私宴に対して、天皇或いは上皇主催の宴の常套的賛辞である仙境の喩えが用いられていることが、重みを持つのである。作者は、極めて意識的に詩序と同じ描写を用いた。光源氏の威徳は天皇と同じである、いや、私宴でこうなのだから天皇以上の威徳なのだ」と源氏物語の構成上、ここで読み手に納得させる意図のためであった。

(27) 本書第三章。

(28) 同注27。